

人生形成の芯となる「仕事観」を考える

四木 信 / OWL 仕事図書室、研究会世話人

人も社会も、これから進む確かな方向を見いだせないまま、不安・不信がはびこる現代社会にあって、今こそ人生形成の芯となる「仕事観」の充実が重要課題になってきたように思います。

社会は一人ひとりの人間観によって支えられています。その人間観は一人ひとりの人生形成によってつくられます。そして人生はその人がいかなる仕事(活動)の世界を創るかによって形づくられます。

良き仕事をするために「仕事観」を皆さんと一緒に考えていきたいと思えます。

1. 大手前大学での経験 仕事観形成サポートプログラムをまとめる必要性

- 1) 自己 - 仕事(活動) - 社会、社会 - 人間 - 人生 - 仕事(活動) - 仕事観
- 2) 知・情・意:精神活動の3要素、5年連続自殺者3万人、10年間の不安・不信
- 3) 仕事観形成を中心にした仕事学: 学びの体系 - 仕事の学校
仕事観形成、 職業世界形成(就職・起業)、 職業力形成(調査・準備)

2. 梶川哲司さん「フランクフル『それでも人生にイエスと言う』を読む」

- 1) 意味を求める 6/26
- 2) 肝(はら)を決める: 態度価値 8/14
- 3) 自己を超える 10/23

3. 人間成長の3段階: 生き方の3タイプ

期: 全能感時代 - 全我 = 自己中心 - 子供意識: 夢・希望
期: 無力感時代 - 間我 = 自己形成 - 青年意識: 美・真実
期: 責任感時代 - 忘我 = 自己公開 - 大人意識: 善・仕事

現代の日本人は、特に 期周辺タイプが多いように思います。

期 期への移行をサポートする「仕事の学校」をつくるために
夢・希望・自分 善・仕事・社会

杉村芳美さん「少年の“夢”と、成年の“為すこと”」

よつぎ・しん

1950年大阪市生まれ。京都工芸繊維大学卒業。18歳の頃から自らの「生き方・仕事観」を本気で考え始める。23歳の時に仕事観形成を自らの課題とする。26歳の時に仕事観は日本社会の課題でもあると自覚し、仕事観を自らの人生テーマとする。その後いくつかの組織に勤め主に雑誌編集をしながら、1980年に仕事図書室を開設。89年から仕事講座や職業相談を開始。93年からOWL仕事研究会や読書会、講座を続けている。2003年夏に勤めを辞め、現在「仕事の学校(仮称)」開設を準備中。

世の中・世界には、楽しいこと、美しいこと、夢や希望がいっぱいある。と同時に、人間は、苦しいこと、悲しいこと、死を支えにして、無常と向き合う中からエネルギーを得て、価値ある生き方・仕事を為そうとする。

五木寛之さん「人間が、生きていることをつらいと思う。多くの人びとが自らのいのちを軽いと感じている。そういうとき、ほんとうに必要なのは・・・悲の感情ではないでしょうか。」(NHK人間講座「いまを生きるちから」2004年4-5月)

4. 仕事観形成の3段階

- 1) 無常世界・死の客観視: 無常・死と向き合う3タイプ、厭世観と自分本位
虚無感: 何をしても意味がない ニヒリズム、厭世観
限られた生命だから、自分のために、好きなことをして、生きたい
「自分のため」の無意味さ・無常・死の自覚: 3頁 社会的価値・意味への意志
- 2) 仕事とは、する事、為す事、つくる事
平田哲さん「第二の誕生」: 14頁参照
サルトル「実存」: 15頁参照
- 3) 「自己的仕事 = 社会的仕事」をつくるために、自己客観力 + 自己公開力を
中嶋哲夫さん「距離感」: 他人との距離感 + 自己との距離感 自己客観力
平井雷太さん「インタビューゲーム」: 自己客観力 + 社会共感力を訓練
HPは公開人間のコミュニケーションツール: 自己客観力 + 自己公開力
自他融合拡大: 共感力 - 共悲力 - 想像力 - 交流力 - 創造力 - 仕事力

平田 哲 職業と人生」

『職業と人間形成』1983YMC A 出版

抜粋/一部編集/四木/OWLの本棚 2001.1

ひらた・さとし 1931-

同志社大学大学院神学研究所修士課程修了。現在、アジアボランティアセンター代表、関西NGO協議会代表理事、日本クリスチャンアカデミー関西セミナーハウス顧問、京都精華大学非常勤講師。

充実した人生をおくるためには、自分の生涯の仕事といえるような職業は何であるのか、またその職業を通じて、どのような人びとと出会い、どのように自分の興味や関心を満たしていくのか、という問いが重要になってくる。つまり、いま一度、人生とのかかわりにおいて、職業というものを捉え直すことが必要とされているのである。

生きるために働くのか、働くために生きるのか、さらに、そもそも私たちは何のために生きているのか、このような問いこそ、男性であろうと、女性であろうと、働く一人の人間にとって根本的な課題である。

亀井勝一郎は、著書『人生論』の一節で、人生について重要な示唆を与えている。

第一の誕生によって、私たちはこの世に生を受ける。しかしこの生は、自分一人の力で生きられるわけではなく、周囲の人々に育まれて成長をする。

第二の誕生とは、青春時代に、自分自身に対して、自己の存在を問うことである。

私はどこから来て、どこへ行くのか。

私は何のために生きているのか。

私は何のために職業を求め、働いているのか。

これこそ、人生にとってたいへん重要であり、しかも、けっして安易に解答が求められない問いかけである。いわば、哲学的、宗教的な問いであり、一生を通じての永遠の問いでもある。

青春期に、この問いをもつかまたないか、という違いは、きわめて大きい。もし、自分の存在そのものに対して、何ら懐疑的にならず、また、客観的に自己を問うてみることもなかった人は、第二の誕生を迎えることなく、ただ漫然と人生を歩んでいるのにすぎない。

今日、この第二の誕生を迎えないままにおとなになってゆく人が多くいることを亀井氏は警告している。

青春時代の学びを通じての人間関係は、知識を共有し、共に考え、意見を交わしあうことによって深まる。

この時代はまた、「第二の誕生」の時期でもある。自分自身を見つめ、ときには孤独感を覚えながら、同じ悩みをもつ友人たちと、深いつながりを作っていく。この中にほんとうの友人を見いだす。もっとも親しみを感じ、心のよりどころとできるのは、自らが悩み、互いに意見を交しあったときに創られた友人とのつながりであるということ、強調しておきたい。

サルトル 実存は本質に先行する」

『実存主義はヒューマニズムである』/『実存主義とは何か』伊吹武彦訳1996人文書院 /サルトル全集第13巻1955/L'existentialisme est un humanisme 1946

抜粋/一部編集/四木/OWLの本棚 2001.8

Jean-Paul Sartre 1905-1980

パリ生まれ。エコール・ノルマル(高等師範学校)卒業。同級生にポーヴォワール、ポール・ニザン、メルロ=ポンティなど。「実存 - 自由 - 行動 - 社会参加(engagement)」をテーマに行動した、哲学者・作家。

著書『嘔吐』白井浩司訳1994/1951人文書院

『存在と無』志松浪信三郎訳1999/1956-60人文書院

『方法の問題』平井啓之訳1962人文書院

『弁証法的理性批判』竹内芳郎・矢内原伊作訳1962・平井啓之・森本和夫訳1965人文書院 ほか。

実存は本質に先行する。人間の本質は、最初から存在するのではない。人間は、実存してのちに、世界内に不意に姿をあらわし、そのあとでみずから考えるところのもの、みずから望むところのもの、みずからつくるところのものになるのである。人間はそれ以外の何ものでもない。これが実存主義の第一原理である。

人間は、未来にむかってみずからを投企することを意識するものである。人間は、まず第一に、主体的にみずからを生きる投企なのである。この投企に先立っては何ものも存在しない。人間は何よりも先に、みずからかくあろうと投企したところのものになるのである。これがいわゆる主体性である。

実存が本質に先行するものとすれば、人間はみずからあるところのものにたいして責任がある。そして人間は孤独である。なぜなら人間は、すがりつくべき可能性を自分のなかにも自分のそとにも見出しえないからである。いいかえれば、決定論は存在しない。また人間は自由である。人間は自由そのものである。そのことを私は、人間は自由の刑に処せられていると表現したい。

刑に処せられているというのは、人間は自分自身をつくったのではないからであり、しかも一面において自由であるのは、ひとたび世界のなかに投げだされたからには、人間は自分のなすこと一切について責任があるからである。

行動のなか以外に現実はない。人間は彼自身の投企以外の何ものでもない。彼は彼の行為の全体以外の、彼の生活以外の何ものでもない。

実存主義は、人間を行動によって定義するものである。人間の運命は人間自身のなかにある。希望は彼の行動のなかにしかなく、人間を生かす唯一のものは行為であると説く。これは行動とアンガジュマン(engagement)のモラルである。

実存的主体性は、個人的な主体性ではない。われわれは「われ考う」によって、自分自身だけをでなく他者をも発見する。他者の面前でわれわれ自身を捉える。他者を自己の存在条件として発見するのである。

人間は、たえず自分自身のそとにある。人間が人間を存在せしめるのは、自分自身を投企し、自分を自分のそとに失うことによってである。人間は彼自身のなかにとざされているのでなく、人間的世界のなかにつねに主体性をもって現存している。人間がまさに人間として自己を実現するのは、自己のほうへ振り返ることによってではなく、ある解放、ある特殊な実現という一つの目的をつねに自己のそとに求めることによってである。